

△資料紹介▽

御仮屋守日記

上江洲 敏夫

(うえず としお 県立博物館学芸員)

解題

この「御仮屋守日記」は、昭和五十八年に那覇市在住の安良城政効氏より寄贈されたものである。安良城家は那覇系士族の蔡氏に属し、名乗頭字は政である。安良城家には先祖の残してくれた貴重な資料が代々継承され、同日記のほか「蔡氏家譜」三冊、「蔡氏家譜仕次」三冊、辞令書十一枚、墓敷譲渡証文一枚が伝存されてきた。これらの資料は一括して県立博物館に寄贈され、展示・研究資料として活用させていただくことになった。

「御仮屋守日記」を残した屋嘉部筑登之親雲上政綱は、「蔡氏家譜」によると、乾隆三十三年（一七六八）に生まれ、親見世筆者・久米村筆者などを経て勘定座筆者となって黄冠に叙せられ、久米惣与頭・那覇筆者・那覇惣与頭・那覇系正を歴任したあと、嘉慶十二年（一八〇七）に御仮屋守となっている。御仮屋守は三年間勤めたことは同日記によっても明らかである。三年間の勤務を終えた年に、御仮屋守の勤務よろしきをえたということで、法司官（三司官）より褒書が賞賜されている。

其方事先般仮屋守勤役之節勤向宜就中例外之御用筋共□之有之候處御都合向宜取計萬端事能相辨殊勝之至候先様御奉公方猶以出精可相勤候依褒美如件

嘉慶十五年庚午八月二十五日

三司官

屋嘉部里之子親雲上

とあるのがそれである。政綱が御仮屋守に任じられた嘉慶十二年には、一種の職務日誌的な「御仮屋守日記」は存在しなかったようである。政綱が書き記したものが最初のものであったと思われる。そのことを推測させるものとして奥書に左記のような記事が確認できる。

右日記の儀、跡々これ無く甚差支候につき、有成の通り書き記し置き候。付いてハ御覧の方御物笑いニも相成るべき哉と恥入り候得共、自分の差し支え候心入れを以て相記し置き候間、冠船城間詰成られ候もこれ有り候へ、借上げたき旨の存念を以て書き記し置き候。尤も相済み次第儘ニ返弁ハこれ有り候様相違すべく候、以上。

この奥書から判断するかぎり、「御仮屋守日記」は政綱が職務を遂行する上で、これまで日記が存在しないために支障をきたすことがあったとして、日記を書くことを実行したことがわかる。それ以後も「御仮屋守日記」は書き継がれたと思われる、その存在が確認されている（『沖繩民俗研究』第四・五・六号に福地唯方氏が「史料紹介」している）。

同日記を検討してみると、きわめて興味ある内容が記述されていることがわかる。御仮屋守は薩摩在番奉行の接待役という職務になっており、在番奉行の動向や冊封使渡来のさいの薩摩側役人の動きなども記述してあるので、在番奉行等の薩摩役人の動静把握の資料としても貴重である。

薩摩藩の在番奉行が駐在するところを仮屋と称し、崇禎四年（一六三三）に創建されている（『球陽』尚豊十一年条参照）。仮屋は那覇西村にあって、薩摩側の命を琉球に伝達・施行する機関であり、進貢貿易の

技荷や薩摩往来の諸船の禁制品搭載・異国船の監視の任にあたったといわれ、構成人員は在番奉行のほか一番仮屋・二番仮屋・砂糖方・足軽・書役・与力仮屋の定式役十一人、横目・大目付・徒目付・書役・足軽の唐物方七人の計十八人からなり、本資料中で役々衆と呼ばれているのがこれにあたる。そのほか大和横目・仮屋守・別当・兵具当などの役職があり、後者の役職には那覇士族が任命されたようだ（『沖縄近代史辞典』）。それらの者以外に仮屋小姓や若衆、中間などの下役なども配置されていたことが、本資料の中で確認することができる。

在番奉行の接待にあたっては、御仮屋の役人はもちろんのこと、里主や御物城も腐心したようである。新奉行の赴任にあたっては、摂政・三司官が出迎えたり、国王が在番奉行所にかけていたり、国王・王子衆・三司官などによる招請や品物の進上などと、こまかい配慮が払われたようである。そのなかにあつて御仮屋守は在番奉行所の建物の管理から諸役との連絡係などもしなければならず、その職務は多忙をきわめたようであり、三司官からの褒書賞賜もうなずけるといふものである。

また、冊封使が来琉すると、在番奉行および役々衆は浦添間切の城間へ移ることになっていたといわれているが、それを裏づける記事も確認できるし、冊封使一行が出帆した当日に、在番奉行をはじめ役々衆が跡見にでかけたりもしている。また後日、冊封使が無事帰国した祝儀のため在番奉行が登城するなどの動きがあつたことも確認できる。

本「御仮屋守日記」には添削したと思われる朱書や挿入ないし削除した墨書が確認される。同日記が役所に保管されるたぐいのものであつたかどうかは判明しないが、少なくとも、本日記の文中に「城間日記」「御仮屋日記」「親見世日記」「御書院日記」などの日記の名が出ており、そ

のほかの資料としては「里主日記」「那覇筆者方日記」「大和横目日記」「那覇日記」「親見世方日記」「別当日記」などの存在が確認されるので、所管の役所には歴代の日記類が保管されていたと思われる。

本資料を翻刻するにあたっては、できるかぎり本文に忠実に直すよう配慮したが、誤解を招きやすい字句の分_レ銭、ホ_レ等、不_レは、異字などは本字に直した。また、「江」「者」「茂」「与」「里」「而」などの変体仮名は、文字の級数をおとして表記した。虫損等により判読できない文字は□で示し、推定できる文字は（ ）で示した。

なお、本資料の翻刻にあたって、不明の数文字は破名城泰雄氏の御教示を得た。記して感謝の意を表したい。

最後に、本書の古文書学的体裁を示すと左記のようになる。

外題	欠落により仮題。日記の「記」の紙片あり
法量	縦二四・四cm 横一九・八cm
時代	嘉慶十二〜十五年
表紙	紙 前・後表紙欠落。修理で保護表紙を新調
装丁	仮綴じ（修理で四つ目袋綴じに改装）
紙数	五十三紙
料紙	楮紙
本文体裁	編年条書。每半葉八行
保存状況	小破（ただし修理済み）

一 嘉慶十二年丁卯十月廿九日御飯屋守被仰候事

一 御飯屋守被仰付候御祝詞并御拜之日三司官衆より御酒代被成下候付

翌日罷登與力御取次御^(候得共)御礼申上候事

^(を以)

本文之通御印紙相濟^(候得共)給地御藏宛書之証文^(を以)請取候尤諸料式

覚 拾貫文先例之通相進候也

一 米貳石五斗起

右私事新御奉行御飯屋守被仰^(付)難有奉存候右ニ付而者公界料差廻申

候間例之通拜借被成下返上之儀者迎役次年御法様之通上納被仰付

被下度奉願候此旨宜様御取成奉願候以上

卯 十一月

屋嘉部筑登之親雲上

本文之通五通相調印紙相濟座江相届候也

覚

一 御飯屋内外破所(御船手・小細工・貝摺・普請・瓦)奉行見分之上

急度仕合候様尤御奉行様来年正月ニハ御入津被成之由候間来六日

取付屹与仕調申様被仰付可被下候以上

卯

新御飯屋守

屋嘉部筑登之親雲上

十一月

右之通承届申候以上

十一月

糸嶺親雲上

伊舎堂親雲上

覚

一 古阿ミ拾三斤

右御飯屋楚くり用として御船手より可被下候以上

親見世江御移之時此通正月掃除之時ハ七斤

十一月

右之通承届申候以上

十一月

覚

一 錢五拾貳貫貳百貳拾六文

但御飯屋砂入上日用貳拾六人壹分壹り三毛

一 同拾三貫貳百文

但同所御門前砂入上日用六人六分

右御飯屋内外砂入日用賃錢として錢御藏より可被下候以上

十一月

右之通承届申候以上

十一月

覚

一 錢三拾八貫文

右御飯屋掃除用之上日用拾九人之賃錢として錢御藏より可被下候以上

卯 十一月

右之通承届申候以上

十一月

覚

一 雜水釣貳ツ

一 同湯子五ツ

一 同多んこ壹荷

右御飯屋掃除用として砂糖座より借渡申様被仰付可被下候以上

十一月

右之通承届申候以上

十一月

一 新御附役三月朔日新御奉行先御入津被成候付艾餅差上候儀里主御

物城得御指圖候処大和横目御兵具當迄吟味之上御奉行御入津不被成内御横目足輕御取合無之例ヲ以差留候事

新御奉行三月十五日御入津被成候付御着船御祝儀之儀來廿二日三日御障無之候哉之旨私江御物城ノ御日間伺書被相渡候付御用達御取次且御門通ニ而相濟候様ニ与之趣取誌申上候処廿二日御障無御座段御返答承其段御物城江相達候事

附御宿移御祝儀之儀新御奉行御入津之時一所可被成由兼而申上置御入津之時本文之通直私御取次ニ而申上相濟候也
城間日記拔書

御奉行様城間村江御引移之時私并別當荷物夫式拾人ツゝ其外段ノ日記相見得候事

城間里主者當日早朝被伺御安否一同差越候事

里主御物城大和横目泊村藏敷之前ニ而致御盃見送有之候事

附今度ハ雨天ニ付屋嘉筑登之筆ニ而本文同断

浦添間切役ノハ村迦ニ而御迎有之候事

御有付并御料理等有之候事

仮里主始役ノ親見世人迄色衣ニ而御仮屋方御見廻有之候事

附翌日罷通候也

御奉行始役ノ足輕迄御有付被成下候爲御礼御用達御使御役ノ足輕迄

仮里主所迄御内分之筋を以被罷出候事

御奉行所江御見廻之上使被成下候事

附今度ハ翌ノ日有之候也

摂政三司官衆御鎖之側ヨリも御見廻有之候事

附前日仮屋守を以御日間伺之上五月十三日本文同断

御奉行御涼仮屋里主ノ兼而申付作調させ候事

附もか礼之儀城間躍有之節ハ取除殊荒場ニ而時ノ吹堂をされ候故御奉行御案内之上此節ハ取除候也

五月五日之節句として仮里主始當詰役ノ足輕迄罷通候事

附那覇役ノハ人数分ニ而節句又ハ時ノ御見廻有之候事

摂政三司官衆申口衆右同断

右之御祝儀として御役ノ御客屋迄被罷登候事

勅使御到着御規式御先格之通首尾能被爲濟候爲御祝儀御奉行様ノ御附役御吏御役ノ衆も仮里主所迄被罷出候事

御奉行様江伊江殿内與那原殿内ヨリ右御奉行様御出帆被成候御祝儀

可被仰上之処冠船御渡來ニ付而者御用多御座候故御内分ノ宜御取計

被成候様御願被置候付御仮屋守江も御相談被成候処義村御殿崇原殿

内ハ右御祝儀被仰上候処右通ニ而者御都合向如何ニ候間猶又吟味之

上取計候様被仰越御紙面之趣御両所江申上候処明日迄者段ノ差當候

御用有之候間來ル十六日七日之間可被仰上候間其内御都合向御取計

被成度旨申上候様被仰付候間左様御心得可被成候此段及御返答候以上

五月十四日

高江洲親雲上

糸数親雲上

馬ハ御模之通卷里ニ卷貫六百文賃錢渡有之候事

附駕籠夫時ノ差出御模之賃錢相渡候也

此ヨリ中

此節唐扁帆之勢頭御迎大夫役者中船頭迄御在番所并御役ノ足輕迄御

見廻申上土産物差上候事

附此節接貢船ハ破損ニ付其段仮屋守を以申上御土産者差上不申餘者本行之通

此節も其通仕置候也

一 御仮屋所々雨溜有之候間今明日中取繕有之候様被仰付被下度奉存候此段申出候以上

六月九日

御仮屋守

宮里筑登之親雲上

屋嘉部筑登之親雲上

右通雨漏有之候段申出候間仕立物奉行見分之上急度有之候様被仰渡候以上

六月九日

宮平親雲上

糸数親雲上

高江洲親雲上

一 御仮屋并仮里主御仮屋守詰醫者御駕籠昇之儀浦添間切々雇夫を以相達候事

一 八月十五日夜仮里主より被相招候付御兵具當高麗餅二甄詰醫者ハ尅尺重武次御仮屋守別當兩人ニ而満んちゆ持参有之候付皆共御座江差出銘々持参候致披露御膳向盛合ニ而差上候事

附此度十五日夜ハ中秋宴ニ付流ニ相成候也

一 九日十三日為月見御奉行様御役々仮里主より招請ニ付御兵具當高麗餅二甄御仮屋守々まん頭詰いさハ阿んもち持参有之候也

一 九月十七日御奉行御役々普天間御参詣ニ付仮里主八寸重一組御仮屋守七寸重尅組醫者ハ六寸重尅組持参ニ而御列有之候也

一 冠船出帆之當日御横め尅人御附役尅人足輕尅人那覇筆者尅人寄問役

尅人為跡見那覇江被差越候先例御座候付御奉行様も御内々御差越唐人住居跡御見物被成候由致承知候間私御列ニ而差越中筈御座候尅那覇役人方江も申越置候此段申上候以上

十月十六日

糸数親雲上

御鎖之側御方

勅使御乗船十月廿日御出帆

太子様被遊 御誕生且冠船首尾能被成御出帆候為御祝儀明後廿八日御奉行様御役々衆御客屋迄御登御挨拶も御座候ハ御登城被成筈之旨御

仮屋守宮里筑登之親雲上承申候此段致問合候以上

十月廿六日

糸数親雲上

高江洲親雲上

一 五月十日御奉行御役々城間村江御引越ニ付いつもの通御供ニ而罷越候事

附此跡冠船通之儀ハ都而相記不申右拔書てんを懸置候尤右拔書

ニ此度此節与有之等ハ當詰之事ニ而候也

一 王子衆三司官衆其外々御見廻并何歟被差上候御礼之儀此跡ハ里主所迄被罷出候処今度ハ無之様里主存分を以申上候処御仮屋方都合向不
宜儀与被存含筋有之由を御書役より私江被申候付其段申入候得共最

初同断之返答有之無是非其通仕置候付為見合書記置候
御仮屋方の都合向不
宜候へ共

一 毎月朔日十五日廿八日礼廻之儀田舎詰之事ニ而此跡も無之ニ付其趣御用達御取次ニ而私ハ里主申付筋を以申上候尤餘之役々衆江是又御咄被成度取誌申上候事

附月越見廻之肴野菜并折め物等も差上不申候尤那覇ニ罷居候役々

よりハいつも之通差上候也

一 王子衆安司衆三司官衆江何敷ニ付御使御飯屋守親方以下別當ニ而候事

本文振廻之野菜ハ間切人仕置候尤先例ニハ着迄も間切人ニ而候処何様内ニ之訳も有之差留得ハ不能候間何か爲見合相記置候

一 七月三日御奉行様御書役御用達旅宿ニ御出ニ付御茶御茶臺ニ而上御多葉御吸物三ツ上御硯ふた三ツ御料理本膳五ツ組ニ手引筭寒上御茶菓子間之吸物四ツ上硯ふた三ツ夜之九ツ時分御帰被成候事

所江之御出ハ
附里主御兵具當進物有之候へ共私并別當ハ差上申候也

一 八月朔日冊報ニ付夜之八ツ時分城間御出達浦添番所暫御扣佐敷御殿ニ而被成御着替明六ツ時分御書院より御注進有之候付同所江同奉行御案内ニ而御出被成候尤御帰之儀平等之側ニ跡見之首尾被申上夜之五時分御帰之事

附八朔御祝儀之儀私ニ相伺御流ニ相成候也

一 文野菜之儀里主御相談之上御奉行所午房一九ニ冬瓜一粒御役ニ足輕江同一粒ツ差上候事

一 八月十五日中秋宴ニ付夜之八ツ時分城間御出達直大美御殿江御出被成候尤御帰之儀冊封之時同断

一 九月十三日里主ニ場江御申請ニ付御兵具當高麗餅二甄い者あん餅老尺重式次御飯屋守別當兩人ニ而まんちめ百粒差出候也

一 九月廿六日御奉行役ニ衆普天満御參詣付里主八寸重一組御飯屋守七寸重一組醫者柴葉餅つり臺二別當八寸二重若衆弁當一持參ニ而罷出御奉行御參錢青銅百疋小姓江持せ御飯屋守相付大夫江渡御役ニ之等ハ問役より直大夫江渡勤相濟候段大夫御飯屋守江相達候得ハ御飯屋守より其段申上御參詣被成候事

附御役ニ衆之御參錢ハ御心次第之由ニ而段ニ多少有之候也

一 勅使様御乗船被成御出帆候ハ急度御飯屋修甫彼是仕合申様構之座ニ江私申出飯里主御物城次書を以印紙申請兼而相届置御乗船早速ニ仕合せ候事

一 古綱拾三斤御船手ニ右通之向を以尤印紙ニ而請取候事

一 庭箒六本親見世ニ同断

一 掃除當兩人里主御物城江申出掃除方御入津同断

一 錢六拾五貫四百貳拾六文

一 但砂入上日用三拾貳人□分卷り三毛

一 同三拾八貫文

一 同掃除上日用拾九人

一 右御飯屋掃除用として尤印紙を以錢御藏より請取候事

本文之通相用度ハ大破手形ニ而相届候也

一 雑水釣式ツ 一同湯子五ツ 一同多んこ巻荷

一 右砂糖座ニ印紙を以借入仕候事

一 御飯屋修甫掃除させ用として時ニ御奉行様江御暇申上見廻仕候事

一 十八日十九日切修甫掃除相調候間廿日より先如那覇御引移被成候様里主ニ御用達御取次同十七日申上候処廿五日被召移御返答被成御座候事

一 附廿日迄ニ者不相調候近御物城安元親雲上不都合申上不天而已段ニ都合有之御奉行様御内沙汰之趣有之私より御用達御内談を以事能相濟候也

一 十月廿五日四ツ時分城間村御出達泊御殿之後松原ニ而御物城八寸重一組大和横目惣中ニ而一組御坂御迎相濟八ツ過時分御飯屋御着被成

候付親見世調之御料理里主御物城御相伴ニ而上御有付差上候儀御入津同断併品員數ハ相替候事

一 其翌ニ廿七日御引越御祝儀として上使并王子衆以下飯屋守別當迄御入津御祝儀同断

御飯屋守別當引移夫貳拾人も問役江申出相達候事

一 附御奉行若衆之儀諸事別當同断併御奉行御申請之儀者先例無之ニ付差留候也

一 城間滞在中毎日野菜入之儀公儀ハ被召留由相答候処那覇筆者我根古筑登之親雲上より里主申請之時者間切寄を以為致用弁由相聞へ候上ハ何様訳も為有之哉往々為見合書記置候事

一 い者喜久村筑登之親雲上者城間村ニ而ハ宿狭由を以那覇筆者ニ而翌年正月十一日御奉行御書役御用達御申入ニ付里主御兵具當私御相伴仕候事

一 正月十七日京堂ら御奉行所江參候付米尅舛しほ尅升炭尅升昆布尅メ焼酎四合扇子二本錢五貫文生か被下候事

上様御不例氣ニ付正月十一日御年頭者被召延二月十七日御登城且遂冊封御祝儀も右ニ付被召延同廿七日四ツ時分御客屋御扣被成候付御番所ニ而御太刀二腰御目録式通ハ私より御附役江相渡候尤御馬代錢ハ御客屋ニ而御役ニ足輕進上納前御書院方江相渡候且又御奉行様南風御殿被為濟御着替所ニ而御着替夫より於御書院御料理御頂戴御書院奉行御案内御用達私ハ御供ニ而西之御殿江□通躍共御見物相濟夜五ツ時分御帰被成候事

附冊封又ハ年頭御祝儀ニ御奉行様御登城被成其翌日御礼ニ御客屋迄御登被成候節ハ王子衆三司官衆之内ハ御腰懸被成候様被申上

管候へ共此節ハ冠船ニ付御招請遲立候間可成程者其節御招請ニ相成候様私可取計与被仰渡候付其趣私ハ御用達江内ニ申請其翌日毎御招請相成候也

一 三月二日御奉行様御役ニ石燈爐御寄進ニ付里主御物城提重大和横め御兵具當私七寸重一組ツ、別當八寸二次持參仕候尤内金宮ニ而ハ親見世之御茶計上住寺勤相濟直御飯屋ニ而御吸物御取看御取替相濟候付御横目御附ニ御模合持參之七寸重一組相披次ニ里主御物城我ニ迄昨ニ御取替相濟御吸物御取看御茶飯出罷帰候且又足輕大和船頭共ハ前ニ石燈爐立合方罷出候付別座ニ而御馳走被下候事

附住寺江御奉行様青銅百疋御役ニ惣中ニ而右同断相進候也

一 三月三日於垣之作場之馬御見物ニ付七寸重一組持參ニ而御取替仕私并別當重ハ兼而御奉行様江差上候段役人迄申合置御取替相濟せ直御飯屋江差上候尤あふし者らハ八月十五日夜右同断ニ付相知不申候事

一 冊封御祝儀御登城被成候御日間伺相濟候付

上様御下御座被遊管候処いつ比御下被遊可然哉之旨表向ハ里主ハ被申上管候得共先内ニ私より相伺候段申上候御用達御使を以大和船至着不致内ハ諸事御不自由候間大和船參四月比被召度御座候段里主江御返答有之候事

一 三月十二日御用達御使を以来同廿日内外

上様被遊御光駕様被申上含候処都而御座向相懸候等ハ御物調被仰付度里主江被申達候且又御膳并御道具類都而御前向相懸候等寄拜借被仰付度私御使を以里主江申入候尤委細ハ御飯屋日記又ハ親見世日記相見得候事

一 御飯屋修甫彼是并古綱拾三斤与手形迄も都而御入津又ハ城間ハ御移

之時同断併平常の相重候等左相記置候事

普請奉行所

一 御書院前庇上かやニも柱唐竹ニ而仕合候

御船手

一 御仮屋御書院庭御吹喚前御門道筋砂置替并内外立砂且又同所御門内

浮道側御書院階迄御通筋故砂高式寸横式尺

錢御藏

一 錢六十五貫四百文仮屋内外之庭掃除并内庭砂入上日用三拾式人七分

賃錢三拾八貫文仮屋内掃除上日用拾九人賃錢

小細工

一 御書院并御着替所裏御座床襖間腰障子之類張替且御書院御着替所御
番所疊仕替尤引手仕替又ハ床縁あかり付合方迄も小細工江印紙相届
候得者同所各構江相達仕合せ候也

親見世

一 庭幣五本印紙を以請取候事

御書院

一 御書院御縁類毛氈敷付并御靈所御小便所紺縁筵敷付其外御前向相進
候等ハ惣而公義調ニ而御書院日記委細相見得候故略之

上様三月廿二日孔子廟被遊

御参拝段兼而里主より御用達御取次を以

申上候付其時附役御使有御座由里主江返答仕置候且又當日附役御使

被成候付右為御礼御書院當御所迄参上有之候事

一 相撲稽古ニ付當日之御用ニも可相成候哉之筋を以着一折七斤焼酎一

瓶差上候事

一 當日御供廻人御書院奉行一人申口兩人當兩人座敷兩人御小姓兩人其
外役七人同詰人数書院奉行兩人當式人御小姓六人其外前日當日詰
人数壹日ニ五拾式人ツ、尤御馳走方之儀者下座ニ相見得候且御供廻

人数ハ御書院奉行當江之晚御馳走同断御吹喚ニ而御相伴無ニ有之候
且王子衆三司官衆與力小姓ハ御家来座ニ而御書院御茶道同断之御馳
走有之候事

一 幕四頭御船手より印紙を以拝借仕相撲頭取江相渡候事

一 四月廿五日 上様御下被遊管候間御書院奉行當以下役御引列被

御下御膳部并御座被成御見分度御有及品書等差上私御使を以御書院

参上御仮屋御尋合之品書等差上候付同十六日同所奉行兩人同當兩人

御物當四人御茶道兩人御包丁一人御膳部持参ニ而被罷出候尤御書院

奉行當之衆ハ御座ニ而御奉行御相伴を以三献相濟故物下附役兩人書

役罷出御吸物四ツ計御取肴五ツ出五ツ組ニ手引肴ツ之御馳走御茶菓

子迄出夜之五ツ時分被罷帰候事

附御物當御茶道御包丁人ハ上御番所ニ而本文同断之御馳走有之候

也

一 右ニ付御肴六斤差上候事

四月廿四日御下

五日当日

一 宮仕三人

一 同六人

一 膳配六人

同廿七日御土産御開之時

同廿七日御土産御開之時

同廿八日

一 同七人

一 膳配四人

一 宮仕五人

廿八日

一 膳配兩人

一 掃除夫之儀掃除奉行の問役江相達差出させ諸事仕合せ候尤兼而請

取置候日用錢を以茶請被成相進候事

一 来廿五日

上様被遊

御下候為御案内撰政讀谷山王子様御在番所江四月廿一日御

出ニ付御鎖之側兼ケ段親雲上里主宮平親雲上御一同被成御出候付御

奉行附役衆一人御相伴ニ而御三献出被御帰候右之為御礼翌日附役衆御使を以御客屋迄被成御登候段里主江申出候事

一 四月廿七日御土産候段ニ付王子衆三司官衆御物奉行申口御出ニ付御

三通之御料理段々被差上殊相撲迄被入御覽候付花として王子衆御一人より青銅千疋三司官衆御一人右同物御奉行申口御一人ニ而青銅貳百疋ツ相撲人江被下候事

附王子衆御一人ニ而與力兩人小姓五人三司官衆御一人ニ而與力一人小姓三人下供迄被召列候也

一 同廿八日惣役長史里主御物城大和横め御兵具當也右同断ニ付惣役長史那覇役人者一人ニ而青銅貳百疋ツ大和横め御兵具當模合ニ而青銅五百疋被差遣候事

附私并別當ハ肝煎故青銅ハ不差遣例之通私別當御奉行江右兩日共差上候也

一 同廿九日大和船頭江右同ニ付御差上□□(候事)

上様御在番所江被遊 御光駕候儀被召延候付御飯屋修甫掃除等之諸手形ハ最前之通座々江相届所々相破候等見分之上仕合候尤疊障子襖間之儀ハ最前之等ニ而相濟せ候御飯屋楚くり用之古綱ハ本物取受八斤充印紙を以御船手ヲ請取候事

一 錢六拾五貫四百文御飯屋内外庭之掃除并内庭砂入又ハ疊取出楚くり用上日用三拾貳人七分賃錢として印紙を以請取候事

一 同三拾八斤也同所内掃除用上日用拾九人右同
一 庭箒五本親見世より右同

一 幕借入之儀ハ右手形を以相達候事

上様来十三日被遊 御下管之御案内として讀谷山王子五月十日御在番所

江御来光之儀四月廿一日同断

一 御書院奉行當兩人ツ御小姓六人其外役々下遣也罷下候付奉行當御小姓ハ御奉行様横め一人附役一人御相伴を以御吸物一御取看三ツ計御酒差出四ツ組手引一ツ御馳走前々當日之朝迄有之候當日晩ハ

御帰城以後御吸物四ツ御取看五ツ計御酒段々差出本膳四ツ組二膳三組之御料理菓子迄有之候御茶道其外之役々ハ次之御座ニ而御取看

二ツ計御酒差出四ツ組之御馳走前々當日朝迄當日晩ハ御帰城以後御吹喚ニ而御吸物一ツ御取看御酒見合差出四ツ組手引一之御馳走有之候奉行當御小姓供并下遣ハ前々當日迄臺所ニ而沓汁一菜御馳走有之候右之肝煎方私ハ御前向差遣候故別當又ハ大和人共ニ而諸事取計有之候事

附御菓子ハ御近付大和人ヲ差上候也

一 五月十三日御在番所江 御光駕之御時御奉行様ハ書役用達私被召列御本門敷類被成御迎候横目附役大和横め足輕ハ御本門外ニ而御式礼御物城ハ御本門内沓間め敷筵ニ而御迎里主ハ御中門より御案内有之候事

一 私別當其外役々ハ朝衣冠親見世之宮仕膳配人者色衣ニ而候事

一 相撲人江花之儀先例無之候処翌日土表取こやし方有之候間子共迄引列見物仕候様御奉行様より御丁寧ニ被仰下殊御奉行ハ青銅千疋酒樽

一 ツ被成下候付私別當兩人ニ而青銅二百疋相進候事
一 御下之時諸事被成御心配候御礼として御書院奉行當御小姓宿迄私御遣有之筋申分御書院參上御礼有之候事

一 御下之時御膳部并御次第書御座配書委細親見世日記相見得候故畧之候事

一 六月二日繩挽ニ付里主御物城八寸重一組ツ、大和横目御兵具當私七寸一組ツ、別當八寸重二次持参を以御盃相濟里主御物城私別當菓子メ物者盛合ニ而最前差上大和横目御兵具當ハ赤飯メ物盛合ニ而時分見合差上候事

一 同十九日久茂地普加地繩挽御見物被成候様御物城より被申上候処御奉行様御暇ニ付御役メ計被成御出候尤いつ連弁當持参有之候私も弁當之筈候処御奉行御出無御座ニ付罷出不申候事

一 六月廿五日かしき御奉行様八寸重一次御横め兩人御附メ兩人足輕兩人役人迄七寸一次ツ、小姓中一尺一重中間中八寸一重相進候事但八寸重下次ニ卷外卷合之例

附八月も同断 米式斗先小豆卷外五合五勺白米二而ハ壹斗五升計
二而白かしき之時も大概白米壹斗五升計

七月十日

一 文野菜御奉行処江冬瓜二粒水瓜一粒御横め御附メ足輕迄冬瓜二粒ツ、差上候大小ハ段メ見合有候事

一 七月十四日湯子御奉行様御書役御用達大碗一ツ、役人筭寒一小姓中飯鉢一中間中小飯鉢一差上候事

附御奉行様者散砂糖役人以下者黒砂糖ニ而候也

一 九月十七日御奉行様御役メ衆始而招請ニ付御前菓子者那ほうろ御薄茶御本御皿御汁御小皿御飯御二御小平御汁御糸目御三御大平御引物御引看御吸物御盆御看御茶菓子丁子餅御薄茶御後茶(和風かすていら・おへ老餅・ほうかん・九年母)御薄茶間之菓子二ツ(二色むしから・江戸高麗)同吸物八ツ同御看招御後段御中皿温口御引汁差上

候足輕役人も右同断取着五ツ差出候御飯屋小姓四人別當若衆脇飯屋小姓迄一座ニ而始而皿汁小皿免し小平手引筭寒ニ茶菓子葛餅盛合菓子高麗餅五切間之吸物五ツ取看硯ふた三ツ并三ツ差出候御飯屋中間三人馬佐事一人親見世佐事兩人ハ皿汁免筭寒硯ふた二ツ焼酎差出候加籠かき諸道具持之流夫拾三人ハ汁皿免し差出候脇飯屋草取ハ汁皿飯筭寒差出候脇役メ供ハ汁皿免し差出候事

附病氣ニ付御出無之方江ハ後菓子間菓子重入付差上候且又留主番之小姓江者高麗餅五切色菓子二切相進候也

本文去年冊封御祝儀之時崎山願出私有増之次書を以申出候処先例無之逆被差掃候ニ付此度ハ本文之通委細私次書を以申出候ハ其節無調部之筋を以度筑登之座敷位被成下候以後為見合書記置候也
口上竟

恐多御座候得共申上候私事

一 何々相勤申候事

一 賀慶拾貳年丁卯十一月御飯屋御門番被仰付當分相勤申候事

附冠船御渡米ニ付城間村迄差越首尾相勤候

右通御奉公相勤申候条此節筑登之座敷御位被成下度奉願候此旨宜様被仰上可被下儀奉願候以上

巳 九月 御飯屋御門番 崎山 尔也

右崎山尔也事去年筑登之座敷御位奉願候処先例無之由ニ而御下被下候上又以上申上候儀御成合之程も如何敷御座候へ共門番之儀御飯屋方江被召付役ニ而勤年数御見合を以筑登之座敷御位被成下様以詰講成仕合ニ而年頭其外何楚屹立候場ニハ御祝儀御礼等申上餘之下役共ニハ相替差立候勤仕候付門番へ向後赤八卷御位添而被仰付度糸領親雲

上御飯屋守之時願出其通被仰付被置候付而ハ何連冊封御祝儀ニ付而

五十五分

但長七寸程沓ツニ而白米四勺ツ、御物城之例

者其御見合をも可有御座哉与奉存候処先例無之逆不被仰付段致承知候去中年冠船御渡來之節之門番ハ黄八卷迄致頂戴居候者ニ而不奉願

一 同廿八日御奉行所野菜二色横め附、足輕迄同一色ツ、相進候事

故先例無之候且又常式親見世佐事も五ヶ年詰込筑登之座敷位被成下

一 正月六日御奉行御書役御用達三社御參詣御腰懸ニ付御三献出本膳五

御模之様承知仕候処去年冊封御祝儀ニ付而ハ勤年数無構被成下且又

一 ツ組手引一ツ料理茶菓子間之吸物九ツ硯ふた三ツ長盆二ツ并三ツ御

城間詰佐事ハ赤八卷位添而被仰付一年之内筑登之座敷位迄頂戴又候

一 夜食迄差上候且又御相伴里主御物城御見舞大和横目兩人相勤候尤用

御飯屋宿主ハ宿借上候筋を以御位も被成下管御座候ハ共宿付与申何

一 達ハ病氣ニ付罷出候事

之勤も無之者共ニも一位ツ、被下置候処御飯屋門番ニハ右ニ申上候

一 附役人小姓本膳五ツ組吸物五ツ取肴五計差出候大和中間ハ本膳四

通之勤向殊御入洋早速、當分迄昼夜詰込且又例年ニ替城間迄差越相

一 ツ組疏中間ハ一汁一菜免し差出候右馳走方之儀者招請外ハいつ

勤候付而ハ右佐事宿主宿付杯、ハ重方ニ相見得候処門番江計上被成

一 も此通ニ而候也

下候而者御奉行様御聞通も御座候而ハ御都合向も如何与奉存申上事

一 正月十七日親見世江御宿移被成候付御肴八斤差上候尤修甫掃除賃錢

御座候条御障も無御座候ハ、此節筑登之座敷御位被成下度奉存此旨

一 右調尤印紙等之儀ハ御入津同断

巳 九月

御飯屋守

屋嘉部筑登之親雲上

一 差紙御印紙申請申渡候事

右申出之通成被下度奉存候以上

一 同廿六日普天満御參詣ニ付七寸重一組持參ニ而御列仕候事

巳

一 御宿移御祝儀之儀御鎖之側、ハ御日間相伺候処里主私取計新御奉行

十一月

安元 親雲上 宮平 親雲上

一 御入津御祝儀御一所可被成由其通相成候事

一 十二月廿二日御奉行御書役御用達歳末御咄御出ニ付御吸物七ツ本膳

一 二月十六日御奉行御書役泊平の川江御步行御腰懸ニ付硯ふた三ツ并

五ツ組ニ手引一ツ料理茶菓子硯ふた四ツ長盆一ツ并三ツ御夜食迄差

一 三ツ吸物三ツ四ツ組手引沓ツ御料理差上候事

上候且又御相伴御物城大和横目一人御見廻同兩人尤御用達病氣ニ付

一 附方、御越之時ハ弁當持參仕候得共是迄相記置候也

附役一人御奉行、被相携罷出候事

一 三月三日艾餅御奉行様拾沓枚役、九枚ツ、足輕役人七枚ツ、小姓中

一 十二月八日鬼餅御奉行十一本横目附、九本ツ、足輕并役人七本ツ、

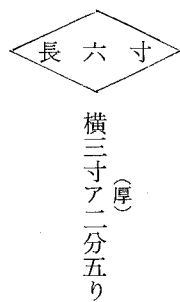
一 間五枚ツ、差上候事

小姓中間五本ツ、相進候尤米沓合ニ而三粒ツ、相作候事

一 附餅上白米七升さ、上白米沓升取合八升ニ而百四拾粒相調候尤少

一 >餘計有之候且又垣作江持參七寸重ハ去年同断

但老杖ニ而白米五勺ツ



一 三月廿七日御茶屋江御奉行御申入之儀早々御初米被仰入度候得共當

分

上様御積氣ニ付御鎖之側伊舎堂親雲上三司官衆御使之由ニ而私取次を以

被召延候得ハ随分御療治可被為召旨如□度候併先様色々御障入可有
御座候間可成程ハ早めニ被召成取計ハ有之間敷哉御尋御座候付則私

一 存を以申上候ハ御積氣之御事候得共外了簡ハ無御座候得共御名代
ニ而も被為濟候ハ随分被御整管之由申上候得ハ弥可宜旨御奉行ハ

御内沙汰御座候段伊舎堂江申上候依之此取膳ハ上段之事候間此段三
司官衆江被申上由ニ而被罷歸於後日右伊舎堂并里主三司官衆ハ御使

之筋ニ而當分御療治被為召御事候得共万一御快全無御座候ハ御名
代ニ而相濟候ハ来ル廿七日来月四日之間御申入可被召由私ニ而可

申上旨被仰付候付其段御奉行江申上候得者當分ハいつもの通ニ而万
一御快全無御座候ハ御客屋ニ而ハ内々右之段申上表向御茶屋ニ而

申上候筋ニ而兼而申上置首尾能相濟申候事

一 右御礼として翌日御客屋御登被成候付美里御殿江御腰懸被成候事

一 四月九日御宿移御祝儀ニ付御奉行所并附々衆迄三合瓶一双ツ目録

取誌差上候事

附新古里主御物城ハ提重持參ニ付御奉行ハ三献并頭素麵取看硯ハ

た四ツ計差出候也

且又古横の衆足輕御宿移も翌日四斤□ニ而候へ共本行同断

一 同廿九日御誓詞之儀御積氣之御事ニ而召延被置候処右之御事御座候

ハ左も可有御座候へ共有御療治方ニ付而者田舎方々御光越も被
遊御事候得者萬一大切成御勤事御延引被為 召筋共ニ御國元御聞通

も御座候へハ御奉行被及御呵候儀ハ勿論御當地御役々迄も可及御沙
汰儀も可致出来哉甚御心配之由御奉行ハ被仰聞候付私申上候ハ右舛

之儀ハ琉球方も甚御心配之御事候得共御積氣之御療治方ハ 御步行
向第一之事ニ而右次第候得共兎略之筋共御聞通も候而ハ別而如何御

事ニ而奉驚御心候御誓詞之儀往古ハ兼而被為整候而御見届迄御座候
様ニも為有御座段承知仕候乍恐右舛之御取計共ニハ有御座間敷哉与

一 存を以申上候得ハ假令往古ハ右様為有之事ニ而も適々成御檢見候
段御國元江申上候上ハケ様ニハ難被成候併當分之御事ニ付而ハ

上様 出御 御一礼被為 召 御血判さへ被為遊候ハ可相濟旨御奉行

御咄為有之段里主江申出候右ニ付御鎖之側伊舎堂親雲上里主所江被
相下私被召呼被仰渡候ハ當分右御同断之御事候間 御血判迄被為

召筋ニ而外之御礼儀向御料理杯ハ不被召揚様ニ与之申上様ハ相成
間敷哉与撰政三司官衆より猶又委細被仰渡由段々被申含候趣申上候

得ハ御取請も宜御座候而右之趣新奉行江被及御相談候処御誓詞ハ御
大切之御勤故両御檢見被成事候間御誓詞神文之讀方ニハ被為召 出

御候上被遊 御血判外之御勤ハ何事も不被為 召様御座御次第書御
調被下候付其段取誌申上候得ハ後日又伊舎堂里主所江被相下右之一

件ハ御奉行様御陰故与撰政三司官衆難有被存候間弥其通可被為 召
旨且御名乗請判ハ兼而被為召旨是又取誌申上相濟候付来廿九日來月

六日之間御障無御座候日御誓詞可被為召旨新古御飯屋守各奉行江可

申上旨被仰渡候付相伺候得者廿九日無御障由御返答御座候右ニ付御初米之 上使内御通三献之御吸物被差出當日ハいつもの通ニ而相勸候尤御案内ハ新古兼而里主計ニ而相濟候事

一 右御礼として翌日 上使又ハ摂政三司官衆御下重御礼被申上候事

一 五月四日御奉行様御乗船江爬龍舟御見物御越ニ付弁當持参ニ而罷出七ツ過時分乗船より御供ニ而罷帰候事

一 同五日粽之儀御奉行江七房御役ニ足輕役人迄五房ツゝ小姓中間江三房ツゝ尤小姓江一重中間江一重ツゝ入相進候事

附白米八舛ニ而ハ粽百二十粒相作候也

一 同十二日御用達堀長藏殿死去ニ付香奠青銅二十疋短香一把差上候且又四十九日之吊被相呼候付あん餅八寸一重短香一把持参ニ而罷出候事

附別當ハ香奠青銅十疋短香一把相進候四十九日ニハあん餅八寸一重持参有之候也

一 五月十七日御首途之儀御奉行より御尋御座候付御誓詞被為濟候ハハ早速被申上御舍之処其以後又以被為差發未不被申上甚御心配之由御返答仕候然者御不例氣之御事候へハ御断可申上候得共適御先格を以被為召儀ヲ御断申上候儀如何与御存合御座候間

上様 出御被為 召候御場所ニハ摂政御勸被成候而御鎮之間ニ而成共暫

出御御挨拶御座候へハ随分可宜候若夫迎も近被遊御座候ハハ其段被申上候而も少も御差支ハ無御座段御断御座候段里主江申上候得ハ後日伊舎堂被相下右躰之儀ハ難有御事候間其通ニ而相濟候様可申上其旨被仰付其段申上御障伺御初米等ハいつもの通ニ而首尾能被為

濟候事

一 五月十八日右御礼として御客屋迄御登被成候付王子衆御模合候餞別被為成候由ニ而兼而御挨拶御座候而宜野灣御殿江御出被成候事

一 同廿日御奉行附役書役御乗船ニ付三合瓶一双ツゝ目錄取誌差上候御奉行江肴八斤御書役江肴七斤計差上候其時新古里主御物城御出之時御宿移同断

附古横め衆足整翌年五月二日本文同断

一 同廿一日御餞ニ付 上使宜野灣王子内御通三献之御吸物其外取看硯ふた五ツ計ニ而頭素麵被差出候事

附王子三司官衆右同断

一 五月廿二日右御礼として御客屋迄御登王子衆三司官衆御宅江ハ御門通ニ而與力大親之間御取次ニ而御通之御挨拶無之様兼而私より里主江申出候尤古里主宮平親雲上宅江御出被成候事

一 同廿四日御奉行御書役餞別之儀私別當若衆模合ニ而御馳走方諸事ハ正月三社御腰懸同断

一 正月より六月三日迄私并別當御扶持方被成下度申出先例之通被成下候事

一 六月三日御奉行御書役御出帆ニ付御船元迄御列ニ而御暇を以罷帰候事

一 六月八日御附役兩人御出帆ニ付右同断

一 正月十七日御奉行親見世江被成御宿移六月三日ニハ被成御出帆候ニ付門番并馬佐事草切一紙私并別當差紙御印紙申請賃錢相渡候事

一 右日記之儀跡々ハ無之甚差支候付有成之通書記置候付而ハ御覽之方御物笑ニ茂可相成哉与恥入候得共自分之差支候心入を以相記置候間

冠船城間詰被成候御仮屋守尋も有之候ハ、借上度□之存念を以書記
置候尤相濟次第髓ニ返弁ハ有之候様可相達候以上

嘉慶十五年庚午六月九日

小笠原彦六郎御仮屋守蔡氏

屋嘉部筑登之親雲上

政綱